

VIVONS RELAX! ...

――肩の力を抜いて生きようぜ！

篠沢 秀夫

聞き手：佐多 保彦 株式会社東横機 代表取締役社長

佐多：先生のご専門はフランス文学ですね。500頁以上ある『フランス文学案内』をお書きになっていることを、仏文を専攻する私の娘から教えられました。そこに登場するフランス作家の作品をすべてお読みになったのですか？

篠沢：全部を読むわけにいきませんでした。それぞれの作家について原文を1頁でも2頁でも読んだ経験があるので、助がつかめるのです。アテネ・フランスで、多数の作家の短い原文をたくさん読み、フランス語だけで行われる直接法のクラスで勉強したおかげです。フランス文学の流れを首尾一貫させて脈絡を付けるため、一人で5年かけて書き上げました。特定の作家にかたよらずに、フランス文学全体を簡潔なスタイルにまとめたのです。

佐多：先生は、なぜフランス文学を天職とされたのですか。

篠沢：欧州を知るには、英文学やドイツ文学ではなく、フランス文学が絶対に必要だと思ったからです。なぜならフランス文学は、英文学より10世紀も早い110世紀から始まっていますし、11世紀に英国を征服して英国王室を始めたフランス貴族たちは英国でもフランス語しか話なかったことを本で読み、中学生の私は「フランス語がイングランドを征服した」と考えたのです。

佐多：日本とフランスは似ているとお考えですね。

篠沢：徳川家康とアンリ4世、それぞれの国家統一の時期がほぼ同じですし、日本が中央集権化に成功した時期も、フランス革命のわずか80年後でした。また両国とも義務教育が徹底しており、地方の人達が心の中で100年も200年も前の歴史的な郷土愛をもち続けているという点でも似ています。

例えば、ブルターニュ地方の農民たちはフランス革命から200年を経た今日でも、農産物問題などで中央政府に反抗し続け、50万人もの人たちがいまだに家の中ではフランス語ではなく歴史的なケルト語を話しているのです。

また日本の東北地方にも似たような人たちがいます。私の所へは、なぜか北の地方からの講演依頼が多いので、ある時、講演会で「私が講演に行く所は、行けども行けども賊軍の地」と話したところ誰も笑わず、講演会の後で、ひとりの中年紳士が肩をふるわせ、いからせながら私に迫ってきました。「賊軍(ぞくぐん)とは当地では言わない、東軍と言ってほしい」と訂正を求められたのです。お若いのにまだ、こんな150年も前の明治維新の言葉を気にかける人がいることに驚きました。しかし私が「今後そういうようにいしましょう」と言った途端に、スーツが肩が下りて、おだやかな、人のよさそうな紳士になりました。

佐多：郷土愛も愛国心の一部かと思いますが、人々が愛国心に目覚めるのはどういときでしょうか。

篠沢：フランス大革命で近代的な愛国心が発明されたときにも、外国の王たちが革命つばしに傭兵隊を差し向け、危機意識が高まりました。日本の愛国心はペリー艦隊の浦賀来航に発していると思いますね。こういう危機意識が愛国心を目覚めさせるのです。今日、自由化やグローバル化が国境を越え、それぞれの国に危機意識を与え始めています。フランスをはじめとする欧州連合でも、日本でも、この危機意識から、大国の責任の自覚という意味での愛国心に目覚めることが求められています。

佐多：先生は昨年末『愛国心の探求』という本を新しく出版されました。先生とはブルゴーニュのご縁で、ワインを飲みながらいつも愉快なお話しばかり聞かせていただいておりますので、この本を通して、先生のもうひとつの面を深くお教えいただくことができました。先生の遺言の感じにも感じ驚いた次第です。どのようなきっかけでこのご本を書かれたのか、お聞かせください。

篠沢：平成10年のサッカー・ワールドカップ、日本のナショナル・チーム第1戦の日、フランス南西部トゥールーズの大スタジアムで日の丸を顔にペイントした青年男女が「ニッポン・チャチャ



篠沢 秀夫 / しのざわ・ひでお

1933年 生まれ。
1959年 東京大学文学修士。
1960年 パリ大学フランス文学教員免状。
1963年 明治大学法学部専任講師、66年助教授。
1971年 明治大学法学部教授。
1973年 学習院大学文学部教授、現在に至る。

この間、
1977年から1988年 TBS系クイズ・ダービーに出演。
1991年1年間、パリに在住、フランス地方を旅行。
1992年から1996年 日本テレビでザ・サンデーのコメント。
1996年 ワイン騎士団のシュヴァリエを叙任。

主要著書

『フランス文学案内』朝日出版社
『もうひとつのフランス・地方は今』白水社
『日本国家論―花の形見―』文藝春秋
『愛国心の探求』文春新書

ゃ！」と叫んでいるのをテレビで見ました。至る所で日の丸が振られていて感動的でした。どこの国のサポーターたちも、自分の国名を連呼し国旗を振っていました。「ニッポン・チャチャ！」という偉大な国際感覚が、日本にも自然な形で定着していると嬉しく感じ、これも新しい愛国心の表現ではないかと思いました。愛国心についてこれまで考えてきたことを、私の経験で裏付けて書いたのです。

佐多：今年初めに、なかにし礼さんが『長崎がらぶら節』で直木賞を受賞されました。「この国を愛するように、この国の言葉を愛したい」と受賞のことで書かれています。日本語を大事にして、世界に通ずる日本の良さを「普遍性」という観点から再認識すること、それを大切に育てて行くこと、そして世界中の人々から愛され信頼される国を目指したいですね。

篠沢：『愛国心』という言葉が世界で最初に使われたのは、フランス大革命の時、一夜で作詞作曲された「マルセーユ節(ラ・マルセイーズ)」の歌詞の中ででした。この歌がパリで有名になり、今日までフランス国歌として伝わっています。愛国心という言葉は、日本には明治維新の頃、輸入、紹介されたのです。

佐多：『愛国心の探求』の「序章 今なぜ愛国心か」の中でお書きになっているように、先生が終戦を迎えられたのは、12歳の時だったそうですね。

篠沢：敗戦前後の日本人の変わり様はショックで悲しかった。一夜にして鬼畜米英から「陽気



なアメリカの兵隊さん」へ新聞の論調が激変し、大和魂はどこへいったのか、日本は精神においても負けた、それまでの自分の人生が全部崩れてしまったと、国民学校6年生の私は敏感に感じました。

近頃では講演でも「昭和20年8月15日以降、僕は一日として心から楽しかった日はありません」と言うことにしています。しかし戦後、日本的なものの全てが悪いように言う人たちがいますが、そうではない。また、今の小学生くらいの世代には、ソ連の崩壊と日本の戦後民主主義のたどった歴史、そして日本の国旗、国歌について長い議論のあったことも伝えたいと思いました。

佐多：日本もここ10年間、世界の人々が普遍的と考えるグローバル・スタンダードのルールやモラルを急速に模索する方向に動き出していますが、日本のシステムは、依然として内向きのムラ社会のままではないでしょうか。

篠沢：日本のシステムは外国人には非常にわかりにくく、またそこがおもしろいところでもあります。国内と外国とを区別し日本は特殊だとする考え方を乗り越えられれば、世界に通用する日本になります。別に外国もそんなに変わったものではないのです。フランスも日本も結局は同じなのです。今の不況の中で日本人は平成の敗戦を味わっていますが、日本の経済のやり方すべてが悪い、と自信をなくす必要はありません。

日本的なものの全部が悪いみたいに考えることはやめて、負け方をうまくしようと言いたい。あらゆる局面で勝たなくてもよい。何か、これをやったぞ、やっているぞ、というものがあれば、それ以外は楽な方がいい、負けばなしでいい。あらゆる局面で勝とうとするから、みんな肩が張っちゃうわけ。かっこ悪いことはしたくないと思っていると、緊張度が高くなる、くたびれてしまう、早死にしてしまう(笑)。肩をはらずに緊張せずに楽しく生きるための「もの考え方」を身に付けよう。維新の戦いでのも負け方、太平洋戦争で負けた経験から学ぼう。

勝つことばかり考えずに、負け方の方も学ぼう。

また国のシステムを考えると同時に、日本人ひとりひとりが自分自身で構築した観念構造で考えるよう努力しなければなりません。自分はこういう人間だと思い込んでいるものを自分で乗り越え、自分についての正しい認識と経験を積んで、自分の観念構造を作り上げましょう。世界から情報を受け取り、学ぶためには、受け取るための観念構造が個人の中にしっかりできていることが必要です。できていないと、すぐに聞き逃したり、忘れてしまい、情報にならないのです。

21世紀の情報社会と世界の中で、日本の愛国心は、かつての国家愛だけが突出した戦時愛国心とはまったく違うものでなければなりません。愛国心は文化の産物なのです。それぞれの国の文化によって、愛国心のあり方は異なります。日本固有の文化や文学を愛する心をもてる人が、他国人の文化を理解できるのです。そういう人こそ、対等でおだやかな国際交流ができるのです。どんな時代になっても、文化としての日本の歴史を忘れずに、日本の文化への責任と自覚をもつことが、新しい日本人の愛国心ではないかと思います。

佐多：あるフランス文学の教授が、日本では文学より漫画の方が盛んで、そのうち大学での授業もデジタル大画面を使って漫画でやる時代が必ず来る、とにかく日本はこれで結構最先端を走っているのだ、漫画を馬鹿にするなかれ、と言われていました。ダイナミックに多様に変化している日本の若者文化をどう思われますか。

篠沢：アニメや漫画本の映像文化に押されて、文学が衰退してきています。日本では、本の漫画やアニメの世界にクリエイティブなパワーが潜り込んでいて、文学の代わりをしているようです。フランスも日本と似た状況で、日本製のアニメや漫画がテレビで大流行です。

だからと言ってアニメみたいなものだけになつてしまうと嘆くことも、そうなるべきだと言い張ることもいらない。そんなことしたら肩に

力が入りますよ。アニメもある、文字文化もある。いいじゃないですか。

また、あのいとりどりに髪を染める若者にも、日本の大人が比較的寛容なのはいいですね。日本で茶髪は単なるファッション、ある時期ハシ力にかかるようなものですから、大きな心で受けとめてあげることが大事です。一生俺は茶髪などと突っ張って生きるなんて考えられないでしょう。

実は、私は「クイズ・ダービー」という番組で、いつも大学教授と思われない最低点に甘んじていました。それを見て笑っておられた方も多かったことでしょう。それもそうなんです。テレビ局の人たちは私の読んでいる新聞や雑誌、本などすべての情報源を調べあげて、私が絶対に知らないこと、あるいは関心をもっていないことばかり質問してくるのですからね。それでいつも「デキガワルイ」と笑われてお茶の間でかえって喜ばれていました。

おわかりでしょう、私から皆さんへのメッセージは、「肩の力を抜いて生きていくことが大事なのですヨ」ということをお伝えしたかったのです。そうでなければ明るく生きて行くことはできませんから。

佐多：肩の力を抜いて生きること……そこに生命力の泉あり、ですね(笑)。



カナダのトロント小児病院

宮坂 勝之

国立小児病院 麻酔集中治療科 医長

私はこの3月まで、トロント大学医学部からAW Conn客員教授として招かれ、世界最高の小児病院とされるトロント小児病院の集中治療部に勤務する機会を持った。私にとっては25年ぶり北米での臨床であり、日本の同じ種類の病院の10倍は多い症例との出会いで、毎日が新鮮な勉強の機会であったが、中でも実際の病院火災に遭遇し、大量の患者を緊急避難させるという経験は、極めて貴重であるとともに、日ごろ余り注意が払われない危機管理という面から病院を考える良い機会を与えてくれた。その経験を含め、日本の小児医療専門施設との違い、そして将来目指している方向などをお伝えしたい。

アトリウム

玄関を入ると、アトリウムと呼ばれるガラス張りの大きな吹き抜けの中庭に入る。あたかもディズニーランドに紛れ込んだようで、病院だと感じる雰囲気は微塵もない。私が以前働いていた、当時770床と世界最大規模を誇ったこの病院にも1970年代の終わりには根本的な改築計画が出されていた。入院患者でも、成長発達過程にある小児では情緒面を重視した健全な環境におくこと、両親の同室が可能なように全病床の80%が個室化され、患者のアメニティスパー



アトリウムの中の愉快な動物たち

スも広げられ、病床数は370床と大幅に減らされた。この20年間でトロントの背景人口が約250万人から約450万人に増加したことを考えると、相当大胆かつ大幅な路線変更である。入院患者は急性かつ重症患者に限る姿勢が明確にされ、社会の要請を視野に入れた患者中心の病院のあり方に基づいた方針転換である。日本の医師や看護婦からは、通常自分の診療科や病棟といった、自分の守備範囲を超えた意見がほとんど出ないことを考えると、大きな違いがある。

振り返って今のトロント小児病院をみると、「個室化をすすめる一方で一般病床は減らし、重症患者用の集中治療病床は増やす」という80年代初めの基本方針に大きな誤りはなかったといえる。しかし計算外だったと思われる点は、1)熟練専門看護婦の極端な不足への対応、2)大幅に進んだ日帰りで麻酔や検査、その他の治療形態の変遷への対応、そして3)出生前診断の普及などによる新生児外科症例の変遷への対応であるように思える。

個室化のもたらしたプラスとマイナス

さて、トロント小児病院の基本的思想として、患者・家族のアメニティ重視に基づいた個室病床化があったが、患者治療が医療関係者まかせでなく、家族が治療チームに参加する姿勢がみられるとともに、早期退院へ向けての意欲が継続され、その利点は最大限に生かされている。しかし一方、個室化は、より多くの看護力を必要とし、歩行移動距離が増えるなどのマイナス面もある。深刻な専門看護婦不足で、実際の病床数を完全に稼働できない状況も生まれている。看護婦不足を呼吸療法士などの職種を有効利用して乗り切ろうとするPODというチーム医療の考えや、12時間シフト勤務や自己スケジュール制(看護婦が自分の希望で勤務日を決める)の取り入れなど、仕事に対する意欲の向上と効率化を図ろうとする試みがなされている。こうした場合感心するのは、看護婦自身の都合より何が患者にとって一番良いかがまず問われる患者中心の思考の徹底である。日本での病院設計でも、予め人手不足の事態にもハード的に対応できる考えが求められる一方で、我々にも現在の形態にとらわれない柔軟な運用の考えが求められると感じられた。



宮坂 勝之 / みやさか・かつゆき

1969年 信州大学医学部卒業
1974年まで 国立小児病院麻酔科勤務
1974年より 1977年まで トロント小児病院、フィラデルフィア小児病院などに留学
1985年より 国立小児病院麻酔科医長
1989年より 国立小児病院麻酔集中治療科医長
1999年より トロント大学からAW Conn客員教授として招聘され、トロント小児病院集中治療部勤務

手術室、ICUでの一足制・脱ユニフォーム

日本からの見学者が驚くことは、医師も看護婦も患者に威圧感を与えないために思い通りの服装で勤務しており、医師や看護婦や、時には誰が両親との区別が難しいことであろう。これには顔を知らないと言われないと職種がわからない不便さはある。もう一つの大きな驚きは、手術室やNICU、ICUへの入室時に、余計なドアや隔壁がなく、スリッパや上履きへの履き替えをしないことである。上履きへの履き替えが、感染防御の点からは「百害あって一利なし」であることがよく理解されている。感染防御で最も重要なことは、患者に触る手を清潔にする「手洗い」であり、外科手術でも清潔を保たなければならないのは術野であり、手術室の床を清潔に保つことに意味はない(床の埃が舞い上がることを防ぐのは当然だが、スリッパに履き替えることは関係ない)。基本的に床は汚いものであり、上履きに替えるため下足に触って手が汚染され、しかもその置き場のために場所を取られ、さらに無意味な上履きを消毒する手間、人材、資金がかかるなど、全くの資源の無駄使いであると、答えは明確である。余分な隔壁の排除は危機管理の面からも重要である。

目に見えない清潔度管理、感染防御こそ重要

日本ではマスク、帽子、スリッパの着用、落下細菌検査といった、目には見えるが時に無意味な清潔度管理が無駄に行われている一方で目に見えない重要な清潔度管理はおざなりである。心移植、肺移植、肝移植などが日常的に行われているトロント小児病院の手術室や集中治療室での感染防御対策は参考になる。

ここでは、臓器移植症例であっても、特別なことは行われず、基本的な感染防御策が励行されているだけである。もちろん無菌手術室とか無菌集中治療室はない。MRSAや特定の院内感染の蔓延が大きな問題になることも極めて稀であるが、抗生物質の使い方や滅菌方法も含めて、感染防御専門家のグループが関与する科学的根



肺移植後ECMO（人工心肺を使った呼吸補助）を施行されている患者



思い思いの服装の医師と看護婦



ここでもニューポート人工呼吸器が活躍している

拠に基づいた患者管理が徹底しているからである。病院建築設計に際しても、見た目の清潔度にしか目の行かない素人の意見ではなく、専門知識を有する感染防御専門家の意見が大いに反映される。手術室と集中治療室は、空気の入れ換えが毎分20回と一般病棟の3倍近い早さでHEPAフィルターを介した循環が行われていること、気圧調整をした隔離、逆隔離病室の整備、薬剤の混合が基本的に薬局で無菌的に行われ、看護婦詰所の裏で無造作に行われないことなどは、一般見学者は気がつきにくいことである。日本で入室時に物理的、儀式的障壁を設けても感染防御上利点がないとの事実が、集中治療室や手術室の大半で知られていないのは、感染治療の専門家はいても感染防御の専門家がほとんど存在しないからであろう。

日帰り検査、日帰り麻酔の増加への対応

トロント小児病院は、麻酔や手術の大半が中央の手術室で行われる時代は去る、との認識で設計され、現在は麻酔の7割が中央手術室の外で行われている。CT、MRI、核医学検査など、小児であるがために全身麻酔下で行わなければならない症例が大幅に増えることを予測し、病院の2階の同一階ですべてが行われるように配置された建築設計がなされ、重症患者の移動によるリスクを軽減する意味で大いに役立っている。こうした面からは、日本の現状はいまだに患者不在である。装置中心、診断医中心の考えで、良い画像をとるために、麻酔設備も揃っていない遠くの検査室まで患者を動かすことは日常茶飯事で、患者の安全性や快適性が二の次になっている。日本のMRI検査室を例にとると、およそ患者の安全や快適性は考えられていない。騒音問題やトンネル閉所恐怖症問題もさることながら、酸素や吸引などの基本的な患者安全設備がない施設が多く、あってもそこで働くスタッフの基本的な救急処置の研修がなされていない。これでは「健康」成人の検査には応えられないも重症小児の検査はほとんど不可能である。もっとも将来はあらゆる診断機器が小型化、機動化され、患者ベッドサイドに診断治療装置がやってくる時代がくるのであろうが、日本ではそれまでは患者受難の時代が続くのだろうか。

こうした予測が見事当たった一方で、予想以

上に増加したのが、日帰り麻酔による手術や検査である。確かに現状でも全身麻酔症例年間2万例（国立小児病院では2,500例）の60%が日帰り麻酔で行われている。これはトロント小児病院だけでなく、北米全体の傾向である。先見の明があったとはいえ、基本的に入院患者を前提に設計され、その一部を日帰り麻酔症例に割り当てた感が否めない現在のトロント小児病院の設備では十分に需要に対応できていないことから、現在放射線下検査手術施設（全身麻酔下でのインターベンション心臓カテーテル、ステント留置、MRI検査など）を拡充中である。

治療形態の変化への対応

トロントは日本の現状とは違い、少子化社会では小児人口は現在でも増加している。そうした中、現在のトロント小児病院の構想で特に素晴らしい成果をあげたのは、同時に慢性患者、長期患者を受け入れる後方施設を別途充実にさせていた点である。結果として院内で人工呼吸管理が行われる場所は、集中治療病棟と新生児病棟に限られ、慢性呼吸患者や在宅患者は別の後方施設で、専門の医療チームにより取り扱われており、その連携はとても良い。

全身麻酔下での検査や処置が予想外に増加したことは既に述べたが、一方で、おそらく出生前診断の普及で外科的疾患を持った重症新生児症例は減少しつつあり、また心臓外科手術症例の増加にも歯止めがかかったようである。またインターベンション症例が外科症例数にも迫る勢いで急速に増えており、また心臓・肺移植に加え、消化管など多臓器移植や悪性腫瘍に対する骨髄抑制的治療など、免疫不全を背景にした急性呼吸不全・多臓器不全症例の増加、器質的脳疾患に対する機能的手術や複雑な形成外科手術、気道手術など、集中治療を背景とする患者の増加が見込まれている。

危機管理の考え

この項目ですべてを網羅することは不可能であるが、停電や不慮の事態への対応をいくつか紹介したい。すべての病室に直接外に通じる窓があり、完全に外界から遮断される部屋がなく、また、バックアップのための自家発電に加え、無停電電池電源が備えられている。ICUと手術

室内にはさらに別途、緊急照明用電池が配備されている。医療ガスに関しては、緊急事態で集中治療室、手術室が自立供給できるシステムが備えられており、これらの動作確認が半年ごとに行われている。水道と下水は各病棟で基本的に2系統用意されており、例えば一方の手洗いがダイヤル式の温度調節機構であれば、もう一方は手動温度調節式といった、異なる方式を用いる配慮がなされている。

日ごろから患者搬送が極めて容易なシステムが組まれており、ベッドごとに酸素ボンベと懐中電灯が備えられている。この1月の雪の降る日曜日の夕方に発生した病院火災はICUから50メートルと離れていない場所での電気系統の故障による爆発であった。開放火災よりは大量の煤煙が生ずる問題であった。私も火災発生直後に呼び出され、約10分後には現場に到着し、他のスタッフと持ち場を分担して指揮をとったが、より軽症患者から移動させることを含め、22名中21名の呼吸管理中のICU患者を火災発生から20分以内で、全く混乱なく避難（同じ階の違う区画への水平避難）させられたことも日ごろの危機管理の有効さが実証された。22番目の患者は両肺移植後の拒絶反応に対しECMO中の患者であったが、この患者の搬送はぎりぎりまで待つことにし、既に手の余った7名が即時移動できる態勢で待機し、結果的には鎮火排烟終了まで移動しないで済ませることができた。開放的なアトリウムでは、煙の充満が問題であるとされるが、今回の火災では、上の階ほどその影響は強かったといわれたが（ICUは病院3階で火災は1階）、幸い排烟は非常に有効に行われた。結果的には病院内の他の病棟での動きがお互いに観察でき、それもパニックを少なくさせた要因の一つの様に感じられた。

手術室の考え

トロント小児病院の手術室は、患者の快適性と外科医、麻酔科医の機動性を重視した設計である。要は手術野の清潔が保てればよいのである。日本の手術室の多くが、見かけ上の「清潔」を重視するあまり、患者や働く者の作業環境を悪くしているのとは大きな違いである。日本では、病室の患者が手術台に乘せられるまでに3～4回の乗せ換えは当たり前であるが、患者に



広く開放的で、障害物のないICU内の廊下
迅速で円滑な患者移動が可能。



広い患者治療スペース
ベッドサイドのコンピュータ端末を操作している看護婦。



広い患者治療スペース
画面左側に手洗いシンク
この患者はARDS(急性呼吸不全)の小児。
腹臥位でHFOW(高頻度振動換気法)が行われ、
CVVH(連続血液濾過)も行われている。

迷惑でストレスだけでなく全く無駄な話である。トロントでは、北米の小児病院の圧倒的多数では、患者は病棟のベッドで、あるいは搬送用のベッドでそのまま手術室内まで搬送される。日帰り麻酔の患者は、家から病院にきた服装のまま手術室に入ってくるのも日常茶飯事の光景である。

ここでは、コの字型に手術室が並び、手術機材など物品は清潔物も不潔物も中央のサプライホールから出し入れし、人間は患者、外科医、麻酔科医とも外周廊下から出入りする方式になっている。外科医は手洗いを外周廊下で行い、個々の手術室に入って清潔な手術着に着替える。外周廊下は、普段は開放された入口を介して、そのまま病棟に続く廊下につながっており、普段の服装、病棟で患者を診察する服装そのまま、入ることもできる。服装や靴からの汚れを防ぐために、靴カバーをしたり手術着に着替えたりする者はいが、清潔の維持のための靴の履き替えや靴カバーの使用はない。

中央手術部とは別に日帰り手術室が5室あるが、ここでも前述と同様の方針はもちろん貫かれている。大量の患者にいかにか自然にか効率よく治療をうけさせるかに重点がおかれ、無意味な清潔、不潔区分は度外視されている。要は、手術する部分の清潔が保てればよい。機能の重視がなされているからこそ日本の10倍近くの症例が取り扱えるのである。

小児集中治療(ICU)部門の考え

小児ICUは最も重症の患者の治療が行われる場所であり、こども病院の入院機能の中心である。ここには、病院設備の最高水準が集約されている。ICU全体として感染防御の観点から気圧を高めに保つために、入口の壁には押しボタンで自動開閉するドアがある点が、院内の他の病棟とは異なる。ICU入室に当然、マスク、帽子などの儀式はない。患者家族は24時間いつでも入室可能で、各室に手洗い台があり、そこで手洗いをするだけである。患者家族への対応にはボランティアが大きな役割を果たしている。

個室化の流れはICUにもあり、正方形の4床部屋が6室で24床、個室が8床、ステップダウンユニット(綿密な観察が必要な患者を収容する)の開放型が8床、都合40床である。個室のうち2つは気圧を高めにもできる前室付きの逆隔離も

可能な個室になっているが、他は気圧を低めに保つ感染患者隔離用である。ICU病棟内には患者がベッドのまま入れる広さをもったトイレを含め、6カ所にトイレがある。4床部屋は、個々の患者の治療域が4メートル四方と大きく、必要に応じてカーテンで区画に分けられる。新生児ICUとは違い、さまざまな治療機器を持ちこんでの治療が多い小児ICUの特性に配慮した設計であり、これは極めて有効に機能している。ICU入室中の患者は、手術や検査のためにモニター機器や人工呼吸器などの治療機器が装着されたままの移動が不可避である。あらゆる機材には大型の車輪がつけられ、また床には一切物が置かれず、床自体にも段差が設けられていないため搬送が極めて容易である。

小児ICUでの情報処理と電源

小児ICUでは、ベッドサイド患者モニターが基本であり、看護ステーションに中央監視モニターは設置されていない。ただ情報化時代に相応して、モニター以外に、患者の検査データなどの医療情報に加え、処方や経過、そして画像情報も入出力できるコンピュータ端末(レビューステーション)が別途備えられている。基本的に医師の処置指示から経過記載まで、すべてがペーパーレスで行われている。このため、ICU内には高速(100base)のイーサネットLANが2系統設置され、各患者に2カ所の接続口が用意されている。通常患者は頭を壁の方に向けて寝かせ、頭側にはベッドと同じ高さのテーブルが作られ、その上に常置する機材はないが、下にはモニター類の接続ボックスやパソコンの端末が置かれている。CRTやLCDの表示画面、キーボードはアームを介して壁に取り付けられている。電源の差込口は1床当たり36口あるが、すべて用いても足りない場合があり、一部の病床では特殊なテーブルタップを使用せざるを得ない状況である。医療ガスも無停電電源も、ICU内は一般病棟と切り離され独立して緊急事態に対応できるようになっている。

患者の移動について

現在のICUが完成したのが1993年であり、それからの6年間で特に変化したのは、患者の移動の頻度であるという。特に現状でのCT、MRI

などの画像診断の多くで、患者(多くは人工呼吸器と10台近くの輸液ポンプがついている)の移動が余儀なくされることから、患者移動を容易にする設備体制が望まれる。将来の日本の集中治療において、すべての医療機器を、機動力に富んだ可動性のシーリングベンダント(ALM社)の上で容易に脱着できる形態はとれないか、移動や患者管理に障害となるドアや隔壁類を、エアカーテンのような原理で少なくすることはできないか、思いを馳せている。これらが21世紀の小児集中治療では当たり前の機能になってほしいと思う反面、患者を動かさずに検査機器が小型化されてベッドサイドにやってくる時代にもなってほしいと思う。

21世紀の計画とその原動力

現在トロント小児病院では今後10年を見越した整備案が討議されているが、それによるとトロント小児病院は、全病床の60%を小児集中治療病床(現状は15%)とするとともにNICU機能を周産期が充実した隣りのマウントサイナイ病院に完全に移動する。外科的新生児はトロント小児病院で治療(現状もそうである)する一方、16歳以上の入院患者は全てトロント総合病院で治療することになっている。また2002年までに完全に医療記録をペーパーレス化し、近隣小児医療施設と医療記録を共有するプロジェクトは既にその最終準備段階に入っている。同じく2001年夏からは遠隔医療部門を24時間機能させ、心肺疾患を有する患児が病院から退院した直後の一定期間、テレビ電話などを用いた遠隔モニター・指導を行う準備が現在行われており、これには日本企業も参加している。相変わず大胆かつ明確な見識を持った計画を実行している施設である。

トロント小児病院の持つ病院らしくない雰囲気は、安易域と治療域を患者が行き来する時に決まってアトリウムの中水や動物たちと話ができるやさしい配慮として機能するだけでなく、患者数よりも多いといわれる院内で働くボランティアの人たちを惹きつける原動力にもなっている。トロント小児病院で働く人々の誇りにはいつも感心する。それにも増してトロント市民やカナダ人全体の誇りにもなっているのは素晴らしいことだと思う。

スイス学校便り

高校の卒業試験と大学入学資格試験

を兼ねるMaturを経験して(1)

米川 恵子



米川 恵子 / よねかわ・けいこ

1979年 京都生まれ。

1993年よりスイス、Zürich(チューリッヒ) 郊外のZumikon(ツミコン)市に在住。

2000年 Zürich州立Stadelhofen(シュタデルホーフェン)高校(ギムナジウム)のラテン語科を卒業。

今回と今回は、終えたばかりの卒業試験と、こちらの卒業式の様子についてお便りしたいと思います。

先日、4年半のギムナジウムの全課程を修了し、卒業しました。テストに追われてばかりいた日常生活と、引き続いて最後に行われた卒業試験に向けての集中的な勉強から、とうとう解放されたことに大きな喜びを感じる一方で、長い間共に過ごしてきたクラスみんながちりぢりになってしまうことに寂しさも感じています。

ギムナジウムの卒業試験は大学入学資格試験を兼ねていて、ドイツ語圏のスイスではMaturと呼ばれています。Maturという言葉はラテン語のmaturusに由来し「成熟した」(英語: mature)を意味します。一方、同じ言語の国ドイツでは、この試験をAbiturと呼び、この言葉はラテン語のabireに由来し、それには「出立する」という意味があります。

前々回に書きましたように、チューリッヒ州の公立ギムナジウムは5つの学科(古典科、ラテン語科、理数科、語学科、経済科)に分かれていて、それぞれの学科には重点の置かれる科目があるのですが、ギムナジウムの生徒が最終的に身につけるように期待されるものは決してこの重点科目についての専門知識ではなく、さまざまな教科全般にまたがった豊かで広い知識、つまり言い換えるところ一般教養なのです。

例えば、私の通っていたラテン語科のギムナジウムでは、最重要科目であるラテン語の他に必修の言語が3つありましてので一見「文系の」ギムナジウムに見えますが、自然科学の科目(数学、物理、生物、化学)もすべて必修でした。これらの科目も、卒業の時点で十分な成績がとれていないと落第するため、生徒たちも力を抜くことはできませんでした。

またこれらの科目担当の先生方は、当然のことながらそれぞれご自分の教える科目の重要性に確信を待っておられ、授業に大変

熱がこもっていたことを思い出します。例えば、私たちの生物の先生はチューリッヒ州のギムナジウム中で最も優れた生物の先生という評判がありますが、いつも生徒の興味をくいと引きつけるような現代社会の最もホットなテーマと結びついた内容を、大変良く準備され、かつ工夫のある教授法で教えて下さいました。まるで先生の「生物」への情熱が爆発しているような感じの授業をされたので、私は心の中で「爆発先生」と呼んでいました。モジャモジャのカールした髪の毛もそんな雰囲気になびいたりだったのです。

さてこのように主要科目とされていない科目にも、一息つかない、ということは私たち生徒にとってさらなるプレッシャーでした。しかしそのお陰で自然科学への興味と関心を大いに喚起され、大学は理数系に進学する予定の友人も少なくありません。

ギムナジウムが重点科目によって種類分けされている目的は、あくまで生徒の入学時点での興味や傾向に合わせるためであり、決して将来的な関心、進路、能力や可能性を束縛したり、狭めてしまうものではないのです。大学で専門的な学問を始める前にそのベースとなる幅広い一般教養、及び論理的、抽象的思考や自己表現の基礎訓練を4年半かけてギムナジウムでしっかりと身につけるものと考えられています。

大学入学資格試験がMaturと呼ばれるのは、これで土台がしっかり固まり、準備が整ったという意味で「成熟」という言葉と結びついたのではないかと思います。

(次号につづく)

言葉の力 言葉の無力

小池 昌代

小池 昌代 / こいけ・まさよ

1959年、東京に生まれる。
津田塾大学文学部国際関係学科卒業。

詩のほか、各紙誌で書評・エッセイ等も執筆中。
また、小さな詩のパンフレット「音響家族」を11号まで発行中。
自らカットや表紙絵も描いている。

著書に、下記の詩集がある。
『水の町から歩きだして』（思潮社）
『青果祭』（思潮社）
『永遠にこないバス』（思潮社・現代詩花椿賞）
『もっとも官能的な部屋』（書肆山田・高見順賞）

「行ってらっしゃい。気を付けて」
という慣用的な文句がある。

この言葉が、たとえ毎朝交わされるとしても、言う方の立場に
立ってみれば、そこには毎回、言葉が意味するとおりの、あるいは
それ以上の、おもいと願いが込められていることだろう。平凡
な言葉だが、結局これ以外では、うまく表現できない強さがある。
一方言われた方からすれば、毎日のことだから、右から左へ軽
く流して聞いているかもしれない。受け渡されたひとつの言葉は、
荷物のように共有できない。おもしろいなと思う。

言葉は、各人それぞれの言語の海のなかにいったん投げ込まれ、
そこで意味付けされるのだろうか。すると同じ日本語を話してい
ても、厳密に言えば、違う質の言葉を、表面上は同じだと思いな
がら、やりとりしていることになる。

こう考えてみると、真の意味で、話しがわかる、話しを通じる、
ということは、もしかしたら、奇跡的で凄いいことなのかもしれない。
だからこそ感動があるのだろう。

そんなことを考えていて、思い出した言葉がある。高校時代の
話しである。

●

私の通っていた都立高校は、地域のなかでは進学校であり、伝
統のある良い学校としてのイメージが定着していた。しかし、そ
の入学第一日目から、私はショックを受けることになる。朝礼で、
先生や校長が壇上に立っても、誰一人聞いている者はいない。み
んなが勝手におしゃべりをしているのだ。最近、若者が人の話し
を聞かないことが、問題になっているが、二五年前にして、すで
にそうだった。実に子供っぽい態度であったと思うが、それまで、
先生の話しは、つまらなくてもおとなしく聞かべしと言われ続け
てきた私には、新鮮に見えてしまったのだった。

さて、そんなある日のこと。相変わらず騒がしい朝礼のさなか、
壇上には校長先生が立ち、挨拶の最後に、何かをさかんに繰り返
している。耳をすますとそれは

「いのちをたいせつに」

という言葉なのであった。しかし、その言葉が出た瞬間、先輩た
ちは、大声をあげて、笑い出す。これは一体どうしたことなのか。

笑われても笑われても、校長はますます大真面目になるばかり。
それを見て生徒たちは、一層、わざとらしく笑い声をあげたて。

「いのちをたいせつに」

唐突な言葉である。ばっきらぼうな言葉である。こうなっ
てこうなるから、だから、いのちをたいせつに、というのではないのだ。
校長は、前後の脈絡も関係なく、

「いのちをたいせつに」

と声をふりしぼって語るのであった。新入生の私は、その校長の、
一種、奇異な印象と笑い声に抵抗するような口調に、ショックを受
けたが、やがて、それにも慣れてしまうと、ああ、また、校長の
「いのちをたいせつに」

が始まったな、と思うようになり、おおぜいの生徒たちと同じく、
苦笑するようになっていく。

後に聞くところによると、この校長は、過去に生徒を自殺でなく
していらしい。それがどんな状況で、いつのことであったのかは分
からない。しかしとにかく、このひとはそれをまったく説明せず
に、いきなり

「いのちをたいせつに」

とくり返すのであった。

最近、なぜか、折に触れて、私は彼のことを思い出す。そして
そんな自分を自分でも不思議に思う。なぜ、あの無骨な校長の、
この平凡きわまりない言葉が気になるのか。

「いのちをたいせつに」

まるで、標語みたいな言葉ではないか。それでも、私が高校生活
を通じて、残った言葉はなにかと言えば、この校長の言葉ひとつ
くらいのものであった。

●

言葉は繰り返されるごとに、言葉自身が、予測もしていなかつ
た力をおびることになる。それは繰り返されて、呪文のような力
を自らにこめていく。これは大変不思議なことなのだけれど、長
いあいだ詩を書いていて、気付いたことのひとつである。それは
例えば、「ここで、この言葉を繰り返した方が効果的だな」という
ような、書き手の意識的な操作によってなされるわけではない。
言葉が自分自身の増殖を求めて、ふえ続けていくような感覚なのだ。



言葉はまず最初に出てきたとき、その言葉が通常使われている一般的な意味を伝えるに過ぎないが、反覆されると、意味の伝達がすでに達成されているので、別の方向へ力を発揮する。別の作用を持つようになる。三度、四度と反覆されると、それはむしろ、文字としての意味を離れ、視覚的には文様に近くなったり、聴覚的には、呪文や音楽になっていくようだ。

「いのちをたいせつに」

「いのちをたいせつに」

「いのちをたいせつに」

この言葉が、二五年近くたった今、不思議な浮遊感を持って、心の表面に浮かんできたのは、あの繰り返しの作用が、知らず知らずのうちに重石となって、この言葉を心の奥底に鎮めていたからかもしれない。

●

しかし一方で、私はこの言葉にある違和感も感じている。

校長先生は、大事な生徒を自殺によって失ったらしいのだが、その事実は、ひとつも私たちに話すことはなかった。……だから、いのちをたいせつにしない、ということは、言わなかった。この言葉の不思議さは、説明抜きで、この言葉が出ていること、つまり、この言葉が出てきた前の段階が大きく欠落していることだ。それが、標語のようなそらぞらしさや教訓的な匂いに繋がっていて、最初、いきなりこれを聞いただけでは、なんのことだが、さっぱりわからない、相手の心に届かないということになる。地面から浮いた言葉なのである。

抽象的な言葉というものは、たくさんの具体的なものを濾過した上で、そのなかから、普遍的な要素をすうっと釣り上げた言葉である。具体を振り落としているのである。しかしその抽象が生まれてきたおおもとは、多くの事実や実際がある。そこが言葉の始まりの一步なのだ。

政治家には言葉がない、という批判がなされることがある。ここに譬く言葉をしゃべるひとが少ないということだ。確かに抽象的な慣用語のオンパレードで、うわすべり。なにごとかを隠蔽するために厚化粧しているようで、退屈だったり聞き苦しいことが多い。言葉の始まりの一步を飛ばして、いきなり、理念などにい

ってしまうので、受け取る側の想像力がしぼんでしまうのだ。

「いのちをたいせつに」

校長先生の言葉の質も、どこかしら、政治家の標語に似ている。その無力さに通じるところがある。

この高校時代を通じて、私は、同級生の男子生徒を自殺によって失った。焼身自殺であった。私は彼が、自分自身に火を付けた、その瞬間を想像して、今でもあっと声をあげそうになる。

校長先生の言葉は、彼には届かなかったし、ある面では、この言葉の無力さを徹底的に証明することにもなったのだ。言葉の無力さ——私は一方で、ひとを支える言葉をはげしく希求しながら、一方でこの無力さに絶望している。

●

それにしても、生徒たちの笑いの渦のなかで、にこりとせず、頬をゆるめることなく、「いのちをたいせつに」と言い続けた校長先生は、一体どんな気持ちであったのだろうか。それをひとつの抵抗の態度と書くことは大げさだろうか。私は、あのときの校長先生を思い起こすと、ささやかながら、あの反覆を「抵抗」と呼んでもいいような気がする。滑稽な抵抗であったかもしれないが、校長先生にとって、あの表現がぎりぎりの伝達手段であったのかもしれないのだから。

このようにして考えながら、私は校長先生の言葉の源に、言葉というものの在りようを、その力と無力とを見るように思う。言葉がどのように発生してくるか、どのように人に伝わり、どのように残るか。

一生を通じて人のなかに残る言葉というのは、ごく少ないと思う。それらの言葉は、なにも格言集に出てくるようなりっぱな言葉でなく、平凡な、ありきたりな言葉かもしれないのだ。その言葉の種が、枝葉をのばすようにして、その後も人をささえ、人を内部から少しずつ変えていくとしたら、それを見てみたい。興味深いことである。

笑い声の渦のなかから浮かびあがってきた校長先生の言葉も、私の知らぬ生徒の死、そして同級生だった彼の死をまきこみながら、今後どのように、私のなかで深化していくのだろうか。

人と出会うように、モノにつまづくように、出会ったひとつの言葉である。

出会い (13)

修道生活 きのう きょう

奥村 一郎



カトリックの古い修道院の生活規則は、日本の禅寺生活とよく似ている。とくに、「祈れ、そして働け(Ora et Opera)」というモットーに生きるカトリックの観想修道院の生活は、禅寺での「座禅と作務(さむ)」に並行する。勿論、カトリックと禅仏教とは、発祥の由来も、その歴史も違うなかで育ってきたことからして、その霊性と文化には、それこそ、天と地、昼と夜、表と裏ほどに相違がある。前にもあげたカルチャーショックのいくつかの小話もその事例。ところで現代では、東西文化交流とか、諸宗教対話とか、文化にも宗教にも国境がなくなり始めている。多元化社会とかグローバリゼーション(総体化)があらゆる社会領域に広まってきている。宗教も例外ではない。科学文明が精神文化を上回り、覆いつくしてしまうほどの現代において、本来、絶対超越の世界を機軸とする宗教は、どのようにして人類の救いとなるのだろうか。著名な京都学派の哲学者、故西谷啓治は、現代をさして「宗教抹殺の時代」といった。今ここで、こんな途方もなく大きい問題をとりあげるつもりはないのだが、「修道生活きのうきょう」を考えると、気にかかることがいくつかでくる。ただ単に「むかしなつかし」の旧世代の愚痴ではなく、「よいものはいつもよい。いつどこでも」ということを確かめたいと思うだけである。前号につづいて、また、例のフランスでの修道生活初期の一コマをとりあげてみよう。

修道院食事のあれやこれ

何しろ、昭和26年、1951年のこと、今から五十年前、外国渡航者は極めて少ない頃、カルメル会というカトリックの修道院に入るため渡仏することになったことは、本誌で既に書かせてもらった。遠藤周作さんが、その一年前、同じフランスの豪華船マルセイーズ号で渡仏されていた。フランスといえば、西欧文化の栄光を誇っていた国だけに、わたしのような、今もさしてかわらぬ粗野なものであれば、どこか、緊張していたと思う。折々、フォーク、スプーンの使い方やスープ皿を持ち上げないで、音をたてずに食べる、とかぐらいは、ちょっとばかり特訓してもらったりした。幸い、わたしの行く処はパリーのような大都会の上流家庭ではなく、南仏の片田舎の修道院。当時は世界大戦後の立上がりも、なお難し

奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

い状況のフランスということもあったかも知れないが、「清貧の誓願」をたてる修道生活であることから、日々の食事は、貧しいという以上に厳しかった。朝食は一切れのパンだけ。チーズもバターもジャムもなし。果物などはもってのほか。一杯のお椀にミルクとコーヒー。それだけ。黙っていたただから10分もかからない。食事らしい食事といえ、次の昼食だけが一日のメイン。というのは、日本と違って、主な食事は夕食ではなく昼食であることは、今も変わらないフランスの風習である筈。まず、スープ、次に野菜類、続いて魚類。最後に果物。以上が昼食コース。カルメル会の食事規定では、病気その他、特別の場合以外、生涯、肉食を禁じられていた。仏教の精進料理に近いが、魚類と卵は許されていた。鯨も魚類にいれられていたのは面白い。夕食はまた、極めて簡素。一皿だけの芋類が豆類。つぎにデザート、それで終わり。どれも量は好きなだけとることができたので、お腹がすくということにはなかった。その頃の日本ではもっと貧しい生活であったのと、それに若かったせいもあったのか、粗末な食事でもそれほど苦にならなかった。

ところで、修道院に入ってごく初めの頃のこと、ちょっとした、ハブニングがあった。どの食事でも、朝昼晩、それぞれの食事作法がきめられている。まず院長から順番に食堂の入り口で手を洗ってから食堂に入る。全員食堂に入ると、結構長い「食前の祈り」をラテン語で唱えてから食卓につく。すると二人の食事当番がでて、台所からつぎつぎと食事を運ぶ。ところで、ある日の昼食のとき、食事当番が、主なメニューの魚をもったまま、わたしの前を通り過ぎてしまった。「アリア!?」という瞬間、もう遅かった。食堂は沈黙厳守。呼ぶこともできない。なんだが急に腹が空いた気分。

どうしょう？と思っても、名案もでてこない。ふと頭に浮かんだ苦肉の迷案。「食事当番の彼は、自分のなすべきことをしなかった。故意ではないから罪にはならないが、過ちではある。とすれば、ちょっとばかり、彼は煉獄の滞在が長引くかもしれない。その罰から彼を救うためには、この過ちに気づかせねばならない」という自分勝手なインスタント神学が出てきた。そこで、少し離れて立っていた彼に向かって、軽く手をあげて合図をすると、それに気づいた彼はすぐ美味しそうな大きい魚をもってきてくれた。万歳！神に感謝！ともかく小さな鬼の首をとったかのようにわたしはご満悦だった。

ところがその後がまずいことになってしまった。食事が終わって皆で中庭にでると、オランダ人のギョーム修練長がわたしに尋ねた。「お前は今、食堂で何をしたか？」そっとやったつもりなのに、残念、見つかってしまったかと後悔。とにかくそのまま告白した。すると「お前は、修道院の食事規定に相反することをした」と、とがめられた。「カルメル会の会則では、自分の食事については何も要求してはならない。しかし隣りの兄弟の食べものには心を配らねばならない、と書いてある」。そこでわたしは反論した。「わたしの隣りが夢中で食べていて、こちらのことなど気づきもしないなら、どうしたらよいですか？」修練長は「そういう奴は、拳骨で脇腹をグッと押してやればいい」とポーズをしてみせてくれた。ワッと皆で大笑い。「よーし、それならいける！」と納得した。

それからだいぶ後で知ったことだが、このような食事規定は、カルメル会だけではなく、どここの修道院も同じだときいた。ある修道院でこれと似た話をきいた。だが、そこでの話の筋は正反対。ある修道者のスープ皿のなかに、一匹の死んだ蠅が入っていた。さてどうしょう？自分のことは何も要求してはならない。さりとて、そのまま蠅を飲みこむ勇氣はない。そこで食事当番がきたとき、小声で「ボクの隣のスープには蠅が入っていないけど？」というと、すぐに皿をとりかえてくれたという。さすがにベテラン！見事な機転。規則を裏返しに使う背負い投げ！新米のわたしの場合は、なけなしの神学知識をひねり出での悪戦苦闘。負けたような勝

ったような？養成責任者のギョーム神父の少々乱暴なボクシング方式は彼のオリジナル。今も懐かしく思い出す。

あの時から、もう五十年近くになる。このような話は遠い昔話になってしまった。今の修道院の食事は、ほとんど例外なく、セルフ・サービスになってしまった。それぞれが自分の好きなだけとって食べる。食事当番などはいない。自分のことを考えるだけでよい。何か淋しい、と思うのはわたしだけだろうか？微にいり細にわたる神堂の作法までとはいわないが、何か大切なもの、隣人愛とか相互愛にかかわるものが見えなくなっているのではなからうか？それに厄介なと思える規則のおかげで、楽しい笑いのひと時がでてきたとも言える。ユーモアは人間の豊かさをつくる神の愛の栄養剤である。現代社会の貧血病はまさしくそこに原因があるのではなからうか。家庭にも、学校にも、宗教界のうちに。

写真展のご案内

P.G.I. Shibaura (芝浦)

- ・ 3月3日(金) - 4月15日(土)
北山由紀雄 作品展 「流転」
Yukio Kitayama "Realize"
- ・ 4月20日(木) - 5月26日(金)
イモージン・カンニングハム 作品展
Imogen Cunningham Photographs
- ・ 6月1日(木) - 7月15日(土)
望月正夫 作品展 「木霊」
Masao Mochizuki Recent Works



© Imogen Cunningham

□ P.G.I. 芝浦

東京都港区芝浦 4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143
月・土 11:00-18:00 (日曜日・祝日・第2、4土曜日 休館)
JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分



メッセージ

みずは生命力のみなもと
いのちの水の羊水から生まれ
死水をとって終わるいのち
天からの雨は聖なる神のみず
生き物たちをうるおし
生なる大地にしみ込む
水はいのちを大地に大循環させ
地球上の万の生き物たち
みずを共有し共に生きる

* 表紙はクリス・スティール * パーキンズの写真4枚を十文字に組み合せ、
天の神様と通信するアンテナをイメージしてレイアウトしたものです。

わが心の遍歴

(3) キリスト教と仏教

花岡 永子



花岡 永子(別姓:川村 永子)/はなおか・えいこ
1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学、'63年同学部
哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士
課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学大学院組織神学科博士
候補生コース留学、'73年同大学より神学博士(Doktor
der Theologie)の学位を取得。'87年師家(しげ)の印
可証を授与され、女性の老師となる。'96年には京都大学
より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸
大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシヤ語、ヘブライ語、
ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学
院人間文化科学研究科教授として哲学、宗教哲学を教える。
著書は『宗教哲学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の
宗教哲学』(新教出版社、'94)、『神と宗教哲学』(北樹出版、
'94)、『キルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キ
リスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

1. 精神的な面で生い立ちの記

幼い時から「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」という言葉をよく聞いてきた。医師の祖父が儒教的な生活を送っていたからである。う、「修身齊家治國平天下」と説く儒教の教えは、先ず生活の全ての基礎を、道に従って身を修めて生きることには置いているからである。「道とは何か」と中学の終わりになる頃から真剣に考えるようになった。特に、中学の日本史の先生のある日の芭蕉についての授業から、「無能無識にさせていただこの一筋に繋がる」と言って、俳諧の道に一生生きることになる芭蕉の生き方にこの上ない共感を覚えた。また高校での、漢文や国語選択の古文の時間はこの世の雑事を全て忘れる程に楽しかった。それでも、「道」が何であるかは、自らの心には未だ直観的にもピンとはこなかった。正にどうして生きて行ったらよいのか全く分らなかった。

その頃は未だ幼かった弟妹の世話や、国立の研究所の責任者として研究に専念する父とそこで研究する沢山の若い研究員の方々への心配りで、家族の世話どころではない母への手回しを途中で止めて、一人京都へ出て行く申し込みに途中で痛めながらも、両親何とて京都に赴いて勉強をしてみたいと、それどころではないその頃の家庭の経済事情をも顧みず願ひ出たのであった。その頃は、丁度父が東大の農学部の大大学院の兼任教授で東京に単身赴任をしながらの広島の研究の勤務でもあった。それで本当は東大に合格できれば経済的には大変都合であった。しかし、受験勉強どころではなかった家庭の事情や広島での教育のレベルの低さもあって、東大受験には二度とも見事に不合格で、自宅で弟妹の家庭教師をしながら浪人をしたり、浪人の二年目には両親からの許可を得て後半の数ヶ月のみ京都の予備校に入ったつもりもした。そしてその京都の町の素晴らしいにすっかり魅せられてしまった。下宿は相国寺の直ぐ近くで毎朝相国寺で散歩ができた(20年後にはこのお寺で参禅することになる)。また京都では、祖父や伯父がその昔京大の医学部の学生として医学を勉強していた何となく懐かしい町であった。更に、是非大学で指導を受けたいと願ひ続けていた西谷啓治先生が、東大の先生と思っていたのは私の誤解で、京大の先生であった。京大に入学して

からこの思い違いに気づいた時は、正に天にも昇る思いがした。

一生を振り返って見た時、高校を出てから大学入学までの浪人時代に思い切り、数々の偉人伝や自伝、ドストエフスキーやトルストイ等々のロシア文学、ゲーテやロマン・ローラン、ヘミングウェイ等々の欧米文学、また日本の古代の謡文学や夏目漱石、森鴎外、武者小路実篤、横光利一、松尾芭蕉等の日頃からずっと読みたいと思っていた小説類や紀行文等々を読書できたことは、正に天からの恵みであった。その頃は、当然のことながら将来どのような人生を過ごす事になるかは全く分らなかった。しかし、今振り返って見ると、この二年足らずの間、家事を手伝い、図書館に通いながらとはいえ、自由に両親宅で読書させて貰った事は、私の人生に不可欠の大切な一時であったことが分かる。

大学に入学して直ぐに、生きる道を求めるべく、先ず聖書研究会とマルクス・レーニン研究会に入部した。しかし、間もなく、私にはマルクス・レーニン思想ではとても生きて行けないことが分かった。後者の研究会の講師は、京大の経済学部出身で、しかも浄土真宗にも生きようとされる、人生に対して大変真摯に立ち向かっている方であった。しかし、研究会で毎週読書したマルクスとレーニン著の翻訳本の「ドイツ・イデオロギー」は、私には余りにも人間的に貧しく思われた。それよりも、聖書の方が逆に、心豊かに思われた。

2. 大文字山までの「静思の時」

西谷啓治先生のご指導を受けたと願ってはいたものの、一体仏教にどの様に近づき、そしてそれを学び初めたら良いのかすら分らなかった。また、戦後の事もあり、子供4人を育てるには余りにも苦しい生活の中から私の大学の費用を出してくれる両親の苦勞を思うと、下宿や大学図書館でじっとしていることも憚られた。それで、仏教は若し命長らえることができた後から深く学ぶこととして、大学の仏教関係の長尾雅人教授の授業だけに限定し、大学の授業の他にも、道を求めるために、キリスト教の教会に通い始めた。大学でのキリスト教の研究会主催の修養会にも夏休みや春休みや冬休みにも出かけた。あるお休みの4、5日間の修養会の折

りに、毎朝大文字山の中腹迄出かけて、朝の4、5時から1-2時間「静思の時」が持たれた。この修養会は、京大の聖書研究会の講師であるオーストラリアのお若い宣教師のご夫婦が、大学のお休みの時には白川川の丘の上の素敵な自宅を、京都の諸大学のキリスト教の求道者のために解放して、寝食を共にし、聖書研究をし、議論をし、讃美歌を共に歌うことを毎年、無私の精神で開催して下さっていたものである。

何回目の修養会であったか、未だ天には星の輝いている草むらの中静かに座る辺りでは、ススキが一面に微かな風にそよいでいたので、2回生の秋の、筆者には2回目の大文字山での修養会でのことであつたと思う。全く不思議な経験をした。その頃は、未だキリスト教のみならず、仏教やまた禅の語録の内容にも無知であった。しかし、今振り返ってみると、禅語録の中のある有名な「天地と我と同根、万物と我と一体」にしてしかも「天上天下唯我独尊」という自己と万物の一体にして、しかも同時に自己の独立自存の経験が訪れた。その当時は、この経験を表現する言葉は到底見つからなかった。その当時は、これこそキリスト教の神経験であると理解された。しかし、例えば、パウロは、Gal.2.20で「我生るにあらざりて、キリスト我が内に生きるなり」と言っているが、筆者にとつてはこの経験は、「我生るにあらざりて、神我が内に生きるなり」というが如き経験であった。しかもその神は人格的な意識的な神ではなく、現在の著者の言葉で言えば、「絶対の無限の開け」としての神である。この経験は、筆者の中でそれ以来ずっと生き続けていた。その時から20年程たってから、夫の死をきっかけに禅の修行を始めた。座らなければ、理屈抜き



1972年4月、ハンブルクのアルスター湖畔にて。
向かって左が西谷啓治先生。
中央は、スカンディナヴィア半島から駆け付けた西谷哲学
研究者。右は筆者。

に文字通り生きて行けなかったからである。しかし、1960年の大文字山でのこの経験は、現在の筆者にとっては、キリスト教の神の経験や仏教的な、あるいは禅宗派的な経験であるのみならず、宗教的な原体験であると理解している。何故ならば、筆者の宗教的な生の原点は、正確にはそこにあると筆者において理解されるからである。この事は、その経験後20年程経ってからの禅の修行における禅寺での参禅における経験からも明らかに言えるのである。

この宗教的な原経験は、キリスト教や仏教のみならず、ある当該の宗教に属する為に、民族、国家、職業、階級、性別等々を問わない世界宗教(あるいは普遍宗教)と呼ばれる、命を賭けて生きることを中心とする道としてのすべての宗教に妥当すると理解され得るのである。筆者には、宗教的な経験とよばれうるもう一つの不思議な経験がある。これも、既成の宗教の内部での経験というよりは、もっと遥に一般的ないしは根源的な経験である。特殊な経験というよりは、日常茶飯事的な経験、日々是れ好ましい経験である。そして、これこそ、すべての領域に共通する宗教的経験であると理解され得るものであると思われる。何故なら、宗教とは、西田幾多郎も語る如く、心霊上の事実だからである。

筆者は音楽が大好きである。特にバッハやモーツァルトやベートーベンの宗教音楽が大好きである。亡くなった夫は、ベートーベンの曲が好きだったが、ギリシャ神話のある物語との関係で、筆者と共通して好きな曲にバッハベルのカノンとジークがあった。夫の生前、この曲を何回となくギリシャ神話の話をしながら二人で一緒に聞いた為か、夫の他界後この音楽が涙無しには聞けなくなってしまっていた。それでも何回となく、全身から涙という涙がすべて枯れてしまいう程にこの音楽を毎日暇さえあれば聞いていた。こうして、この音楽を一人で一体何百回聞いたことであろうか。そうしているうちに、ある日、不思議なことが起こったのである。突然、夫の生前の思い出とそれに纏わる悲しみとその音楽の表しているギリシャ神話の悲しさとの両方の悲しみのどん底から、その音楽が生まれてきた当時の農民たちの姿を始め、それを取り囲む田園風景が明るい太陽光線の中でありありと

眼前に開けてきたのである。つまり、音楽においては、それが本当にその音楽に成りきって聞かれる時には、聞く者の感情や意思の領域は越えられ、更にその音楽が表している世界も越えられ、その音楽が成り立っている根本の世界が聞く者の心に露わになることが、分かったのである。この事は、音楽のみに当て嵌まるのではなくして、すべてのことに当て嵌まると思っている。

一般的には、数珠とかロザリオでは、その玉は個人を、その紐は人類の立場を表しているとして理解されている。(筆者は更に、玉にある穴は、国家とか民族のような種の立場を表しているとして理解している)が、ここでは、玉を各々の科学と、また紐はすべての科学に通底している普遍の立場、ないしは絶対の無限の開けと理解されるならば(この場合には、玉の穴は各科学を系統的に分類した時の種の段階を表すことになる)、次のように語られ得る。つまり、どんな学問でも、またどんな生活領域でも、一つの学問ないしは一つの生活領域(数珠やロザリオで言えば、一つの玉)が究められるならば、遂には、すべての学問に開けている普遍の立場、ないしは絶対の無限の開け(数珠やロザリオではすべての玉を貫き通す紐)が開かれてくると。

同じことを宗教で語るならば、個々の宗教には、それが真に人間の個の心の琴線に触れ得るものであるならば、普遍の立場、絶対の無限の立場が開けていると言える。従って、キリスト教と仏教にも、その成立の時代や背景や創始者等々の相違はあれ、両宗教の根本には当然、通底する開けが開けている。この事実は、筆者には、大文字山の静思の時の宗教的原経験と夫の他界後の座禅の修行において初めて自覚的に開かれることとなる。

3. キリスト教と仏教に通底するもの

筆者の恩師である西谷先生は、「成りつつ成った仏教徒にして、同時に成りつつあるキリスト者」とであると自称された。筆者も生涯「成りつつあるキリスト者にして、同時に成りつつある仏教者」でありたいと願っている。筆者の宗教的経験は、如何なる実体的な枠組みをも置かない「開け」の、しかも「絶対の無限の開け」の経験である。この開けは、人格神のキリスト教の神



1972年4月、ハンブルク空港にて。
向かって左が西谷啓治先生。
中央が、リース・グリーンング夫人。右が筆者。

として経験され、表現され、また仏教の縁起として成り立っている仏として、あるいは無実体的な無ないしは絶対無として、経験され、表現されることもある。しかし、これらの経験や表現のいづれにおいても、自己否定的なあり方と自己肯定的なあり方とが同時に成り立っている。人格的で祈りの対象となるキリスト教の神も、「己れを空しくして僕の形」(ピリピ2、7)をとり、人間の姿になった自己空化、自己否定の神でもある。筆者の言う「絶対の無限の開け」における「絶対」という言葉も、天地や万物の自己否定と同時に人間の個の自己否定とを意味している。天地も万物も自己を空しくしてこそ人間の個と一体、平等でありうるし、その逆もまた真であるからである。また「無限」は、その自己空化が止まることを知らぬ無限のものであることを意味する。筆者は、以上のように、両宗教に通底するものを「絶対の無限の開け」と理解している。

P. G. I. 統合のお知らせ

このたび、東京都の都市計画「環状2号線」に伴う区画整理のため、2000年3月末日をもちまして虎ノ門のギャラリーを閉館し、芝浦に統合いたしました。4月より業務は芝浦にて、引き続きこれまで通りにギャラリー及び用品ショップを営業しておりますのでよろしくお願い申し上げます。

フォト・ギャラリー・インターナショナルは1979年4月にオープンして以来、「P. G. I.」の名称で多くの皆様から親しまれ、ご愛顧いただいております。誠に残念ですが、満21年目を迎えたこの年に虎ノ門での営業は終了させていただきました。芝浦に移りまして、創設のポリシーを忘れずに、なお一層企画展の充実にも努めたいと存じますので、今後ともご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

ブルゴーニュの20世紀を振り返る

ロマネ・コンティをめぐるド・ヴィレーヌ家とルロワ家

横山 弘和



横山 弘和 / よこやま ひろかず
1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在佐多商会ヴィタリテ事業部在籍。

20世紀を振り返りますと、この100年の間に、我が国における食生活は大きく変わりました。同時にアルコール飲料についても、日本古来のお酒に加えて、ビール、ウイスキー、そしてカクテルといった洋風な飲み物が今世紀前半から飲まれ始めました。しかしワインは、それが人類にとって一番古い飲み物であるにもかかわらず、日本人の生活には縁のないものとして、あまり関心が持たれませんでした。日本でワインという文化的な洋酒が理解され、少しずつ普及されるには、1970年代まで待たなくてはなりません。ずいぶん遅れたものなのです。それが今では、ワインの持つ幅広い多様性を、時、場所、目的、一緒に食べる食事等によって変わるヴァリエーションを楽しむ人々が、非常に多く増えています。しかし、我々消費者がワインを買い求め、栓を抜きグラスに注いで楽しい一時を過ごせるまでには、ワイン生産者の大変な苦労と努力があってこそ実現するものです。ブルゴーニュで今日、他のワイン産地ではまねのできない優れたワインの数々を、世に出すワイン生産者ド・ヴィレーヌ家とルロワ家についてご紹介しましょう。

ドメヌ・ド・ラ・ロマネ・コンティ(DRC)

まずロマネ・コンティについて説明しましょう。この畑はコート・ド・ニュイのヴォーヌ村にある、特級の格付けを持つ畑です。ヴォーヌ村は、北のヴージュ村と、南にニュイ・サン・ジョルジュの町のそれぞれ有名なワイン産地の間に位置しています。1.8ヘクタールの広さで、毎年約7000本前後(1996年は6101本)の赤ワインを生産しています。この畑でのぶどう栽培の歴史は古く、西暦1232年にシトー派の修道院によって始められたと伝えられています。しかし畑の名称ロマネ・コンティは、1760年にこの畑を所有したコンティ大公(Prince de Conti)の名に由来します。その後、1795年に売却され、何人かの手を経て、1869年にデュヴォー・プロチェ家(M. Duvault Blochet)が買い取り所有することになります。1906年にその子孫との婚姻で遺産を相続したド・ヴィレーヌ家が現在50%の株を所有しています。そして第二次大戦中の1942年にオーセー・デュレス村に本拠地を持つワイン仲買商、メゾン・ルロワのアンリが50%の株を取得し、経

営に参加しました。それ以来、両家を代表する二名での共同経営で運営されています。現在はドメヌ・ド・ラ・ロマネ・コンティ(DRCと省略される)の社名で、ロマネ・コンティ(モノポール)と、他にラ・ターシュ、(モノポール)、リシュポール、ロマネ・サン・ヴィヴァン、グラン・エシェゾー、エシェゾー、ル・モンラシェ、パタール・モンラシェの各グラン・クリュに畑を所有し、その資産価値の大きさは計り知れません。特にフランス国にとって、ロマネ・コンティの畑の重要性は、パリのルーヴル美術館やノートルダム寺院等の国家的遺産と同列に評価されています。まさにお金では買えない、並みはずれた資産といえます。

さて、1945年に不幸な第二次大戦が終わった後、数年間ブルゴーニュ地方のワイン生産者は、戦争中の人手不足やぶどう栽培に必要な色々な物資の欠乏で荒れた畑の修復に苦労をします。DRCも例外ではありません。当時のロマネ・コンティの土壌は、手入れ不足から疲弊していました。加えてぶどうの樹齢は古過ぎて(50~60年)果実があまりつかず、生産性が非常に悪くなっていました。そこで1946年から1951年にかけて、思いきった、ぶどうの樹の植え替えが行われました。その結果、DRCはその名声を取り戻していきます。それを実現させたのは、戦争中の1942年にDRCの株を取得し、経営に参加したアンリ・ルロワが、自身の持つ豊かな資金をつぎ込み、家業であるメゾン・ルロワの経営を疎かにしてまでDRCの経営を優先させ、その復旧に情熱を燃やした功績があったからだと考えられています。

その後、1950年からド・ヴィレーヌ家の代表をつとめたアンリ・ド・ヴィレーヌの引退により、その息子オーベルと、同じくアンリ・ルロワの次女のラルーが、二人で両家を代表して対等な立場での共同経営者として、協力していくこととなります。ちょうどその頃、いわゆる世界的なワインブームで特に最高の評価を得ているロマネ・コンティの値段は、うなぎ登りに高くなりました。しかし二人のワインに対する考え方、DRCの経営についての意見の相違等が、両者の関係をだんだんと険悪なものにしていきます。ついに1992年1月、DRCの株主総会がもたれ、採決によって、ラルーが18年間たずさわった経営からは

ずされることになります。代わってアンリ・ルロワの長女で、DRCの株25%を相続しているラルーの姉ポーリーヌ・ロシェの次男アンリが新しくルロワ家を代表して共同経営者の一人となり、オーベル・ド・ヴィレーヌとDRCの経営に責任を持つこととなります。それを機会に、日本での総代理店も高島屋からサントリーへと変わったのです。

オーベル・ド・ヴィレーヌ(Aubert de Villaine)

オーベル・ド・ヴィレーヌは1939年生まれです。彼が生まれてすぐに第二次大戦が起これ、父親のアンリは軍隊にとられ、後にドイツ軍の捕虜となります。従って、彼の父親の記憶は戦争が終わり、アンリが復員した5才の時からです。当時、彼の家族はブルゴーニュから西に120キロ離れたムーラン(Moulin)に住み、父は土地の銀行に勤め、家族を養っていました。その頃はたえろロマネ・コンティのオーナーでも、ワイン生産だけでは食べていけないのです。そしてアンリは1950年に、彼の父親でありDRCの共同経営者であったオーベルの祖父エドモン・ド・ヴィレーヌ(Edmond de Villaine)の後を継ぎDRCの経営にたずさわることになります。一方オーベルは13才まで土地の学校に通い、後、パリの近郊で寮生活をしながら大学に進みます。大学ではギリシア語、文学そして最後に法律を学びます。卒業後、アメリカに渡りニューヨークの有力なワイン商の紹介で、カリフォルニアのアルメダンのぶどう園で1年と4か月を過ごします。その頃はまだまだ知られていなかったカリフォルニア・ワインが、現在のように有名に始まった頃で、活気あふれるナバ・ヴァレーのワイナリーでの貴重な体験は彼の人生での非常に幸福な一時期でもあったと、今でも懐かしく回想しています。

さて、オーベルとDRCとの関係は常に近いものでしたが、彼がそこで働くことと決心したのは、アメリカから帰国した後の1965年からのことです。最初の3年間、彼は主に畑とカーヴでのワイン作りの仕事を分担し、同時にメゾン・ルロワでワイン取引(Negociant)の実際を学びました。1969年、彼は商用でアメリカを旅行しました。その際、後に彼の一生の伴侶となるアメリカ人女性ベラ・フェアバンクスと出会い、1971年にヴォーヌ村で式を挙げ、結婚することになるのです。



オペール・ド・ヴィレーヌ氏と佐多社長
D.R.C.のカーヴにて



ラルー・ベーズー = ルロワ女史と佐多社長
D.R.C.のカーヴにて



ロマネ・コンティの20世紀前半のヴィンテージワイン
(1918 - 1938)の残り少ない貴重な在庫

結婚を機会に夫妻は南のコート・シャロネーズの町シャニーに近いブーズロン村に、ワインセラー付きの古い農家と付属するぶどう園を買い、新しい住まいとします。そこでオペールは遺産として引き継いだDRCとは別に、彼と妻であるバメラとで独自の新しいドメヌを始め、最高級赤ワイン、ロマネ・コンティとはまったく違う、大衆的な白ワイン用の品種アリゴテの栽培を始めます。その後、ぶどう畑を買い足したり、あるいは賃貸契約で広げ、事業は順調に伸びていきます。その間、彼はブーズロン産のアリゴテ品種から作られるワインと、他の産地で作られる同じアリゴテ種ワインとの違いに気がきます。明らかにブーズロン産は一種独特な良さがあるのです。そこで彼は、当時アリゴテが例えどの産地で作られようと単にブルゴーニュ・アリゴテという原産地呼称でしか売れなかつたのを、ブーズロン産のアリゴテに独自のアペラシオンを獲得するために運動を始めます。そして1979年に新しくブルゴーニュ・アリゴテ・ド・ブーズロンとして独立した原産地呼称証明をラベルに明記することに成功するのです。これは自分の作るワインの品質に対しての揺るぎない自信が評価されての格上げで、素晴らしいことだと思います。彼のA&P・ド・ヴィレーヌ社はアリゴテ以外にも、ピノ・ノワール種から優れた赤ワインと珍しいロゼを市場に出しています。同時に彼の温厚で忍耐強い紳士的な人柄は、同業者たちからも厚い信望を得ています。

アリゴテ種はブルゴーニュ産の白ワイン用のぶどうとしては、シャルドネ種に次いで第2位の地位にあります。決して高級ワインの扱いを受けず、販売価格も日常ワインとして2000円前後で買えます。この品種は収穫量が多く果実は早く成熟し、日照の良い年は、快い酸味で食欲をそそる軽快なワインを生み出します。瓶詰めされた後は向上するような熟成はありえませんが、常にボジョレーの様に、若い内に消費するのが上手な飲み方です。ブルゴーニュ風食前酒キールを作るのに一番適しています。またクロ・ド・ヴージュでのシュヴァリエの定例大晩餐会では大抵食卓でこのワインが一番最初にサービスされます。

ラルー・ベーズー = ルロワ (Lalou Bize-Leroy)

メゾン・ルロワの当主ラルー・ベーズー = ルロワは1933年にアンリ・ルロワの次女として生まれました。メゾン・ルロワは1868年にアンリの祖父フランソワが、オーセイ・デュレスでワインの仲買商として事業を起こしたことから始まります。商売は主に若い高級なワインを買い取り、自社のカーヴで樽熟し、メゾン・ルロワのラベルで売ることでした。事業は確実に伸び拡大しました。そしてアンリの代の1919年からは、更にブランデーの混合酒などの輸出が成功して資産を大きくし、1942年にはDRC社の株50%を取得することができたのです。

その後、DRCの経営も軌道に乗った1980年、アンリ・ルロワは86才で惜しまれながら亡くなり、彼が残したDRCの株は二人の娘が相続しました。従って現在DRCの株はアンリの長女ボーリーヌと次女ラルーが25%ずつ持っていることになりました。同時にラルーはDRCの共同経営者として、オペール・ド・ヴィレーヌと同格の立場で18年間活躍することになったのです。

さてラルーは3才の頃から父親のそばでワインに接し、ワインの香りや味見が大好きでした。成長してソルボンヌ大学で学び、ドイツ語を専攻し、他にラテン語、ギリシャ語も得意でした。ここで彼女の生い立ちや現在の人柄を語るのに欠かせないのが、彼女の趣味の山登りのことです。ロッククライミングが大好きで、一流のアルピニストとしても評価されています。適齢期を迎え求婚者が多い中、岩登りの出来ない人とは結婚しないと、親の反対を押しきり、スイス人のスキー選手で登山家のマルセル・ベーズ氏 (Marcel Bize) と結婚し、一時アンリを失望させます。ラルーが家業のワイン取り引きに最初関係したのは1955年23才のことです。この時、彼女はメゾン・ルロワの共同経営者としてワイン部門の責任者となります。その頃のメゾン・ルロワは社長の父アンリがDRCの経営にかかりつきで、家業のルロワ社にはあまり力を入れずにいました。そんなことから任されたルロワ社の実情はかなりお粗末でした。それを一流のドメヌにしようと、岩登りにかけたと同じ焼くつような情熱をそそぎました。その頃、彼女はワインテスティングの練習に朝8時にカーヴに入り、夕方5時まで100種類ものワインを試飲したといひます。彼女は「ワイン作りの哲学は

山登りに似ている。限界との挑戦である」と言っています。

1988年、ラルーはDRCの経営、ワインの販売に従事する一方、同じヴォーヌ村に存在するドメヌ・シャルル・ノエラを買収します。そしてこのドメヌが所有するすぐれた畑の数々を手に入れます。それをメゾン・ルロワとは別に、ドメヌ・ルロワと名付け、新しい会社を設立し、同時に、ぶどうの栽培をビオディナミ農法に切り替えています。日頃から「ぶどう栽培は土壌が一番大事、そして厳しい剪定、量より質」といった彼女の理念を実行に移します。その様にして作られたワインは試飲され、その結果ドメヌ・ルロワのワインは異議なく今日のブルゴーニュの最も輝くスターだと評価されました。しかしこの理想のワイン製法は、当然、他のドメヌと比べると生産量が著しく少なくなり、その分、売値に響いてきます。そこで彼女のワインの品質が高い評判を得たのに嫉妬する競争相手たちは、その値段を「天文学的価格」と言い、マダム・トロ・シェール (英語で Mrs. Too Expensive の意味) とあだ名までされます。しかし彼女は言います「私はワインをギフトのように振り撒き与えようことはできません」。そしてきっぱり「最高の品質にはどんな値段も高過ぎることはありません」と。ドメヌ・ルロワが所有する特級畑はシャンベルタン、ラトリシエール・シャンベルタン、クロ・ド・ラ・ロッシュ、ミュジュニ、クロ・ド・ヴージュ、リシュブル、ロマネ・サン・ヴィヴァン、ゴルトン・ルナルド、ゴルトン・シャルルマニユです。他にドメヌ・ドーブネ (Domaine D'Auvenay) を所有。

オペール・ド・ヴィレーヌの言葉

「今日の午後、私は林檎を食べました。それは大変美味しい林檐でした。そこで私は悟ったのです。我々に与えられた恵みで粗悪な産物を作り出すことは、罪悪である。それは自然に対しての尊敬を失うことになるからです。」

「現在のブルゴーニュの豊かさは最初修道士たちによってもたらされたものです。我々ブルゴーニュ人は、彼らによって培われたものを、大事に保持し続けなくてはなりません。そのことを自覚している人々が充分な数にいると思います。この土地は結局継承され存続していくための土地なのです。」

「ブルゴーニュには、何か神々しさ(素晴らしい)が潜んでいます。そう思いませんか?」